

文禄・慶長の役とキリシタン宣教師

柳田利夫

キリシタン宣教師の文禄・慶長の役に対するかかわりあい方を、主としてイエズス会宣教師による史料をもとに、若干報告したいと思う。もとより、これまで積み重ねられて来た日本国内史料に基づく研究に何物をも付け加えるものではないが、当時の宣教師が侵略戦争たる文禄・慶長の役を如何に捉えたかを検討してみるのもあながち無意味な事でもないであろう。

I

朝鮮の地が宣教師にとって大きな関心を引いていた事実を物語る史料には今のところ出会っていない。宣教師側の史料を網羅して調査した訳ではないが、少なくとも宣教師が当時（文禄・慶長の役前後）積極的に朝鮮布教を推進しようとしていた痕跡は見られない。彼等が曲りなりにも朝鮮を布教の対象として意識しはじめるのは、むしろ秀吉側からの働きかけが、切っ掛けになったものと思われる。

一五八六年、準管区長ガスパル・コエリヨは秀吉と大坂城で会見し、その席で秀吉は宣教師達に中国征服の意向を披瀝し、通訳

文禄・慶長の役とキリシタン宣教師

として同席したルイス・フロイスの報告に拠れば、その実現の為に二隻のポルトガル軍船の斡旋を求め、この斡旋に対する反対給付として、征服地のキリスト教化、教会建設、更に日本の半分のキリスト教化を申し出たと言う²⁾。一方、やはりこの会見に同席したオルガンチノに依れば、この軍船の斡旋はむしろコエリヨ側が積極的に申し出たものであるとしている³⁾。後にオルガンチノ同様、コエリヨの過度の政治的軍事的介入の方針に対し、強烈な批判を行なった巡察師アレックスサンドロ・バリニャーノも、一五九〇年一〇月一四日付（一〇月一二日付書翰の追伸部分）書翰において、コエリヨが軍船の斡旋を自ら申し出たばかりでなく、秀吉の中国出兵時にはインド副王に依頼してポルトガル人の援軍をも派遣させようと述べたとローマの総会長に宛て書き送っている⁴⁾。

ポルトガル軍船斡旋の提案を行なったのが秀吉であるのか、宣教師側であるのかを確定するのは現在の所不可能という他なく、それを徒に穿鑿するのもあまり意味があるとは思われないが、少なくとも会見の席上中国侵略についての話題が出され、ポルトガル軍船の斡旋が話し合われた事、更には宣教師側がこの斡旋を拒

否していない事等、諸史料における共通点を再吟味してみる事は重要であろう。この報告で問題とする限りでは、これ等の点からだけでもこの会見における宣教師の思考のパターンはある程度明らかになると思われる。即ち、秀吉の中国侵略戦争に対する援助が教勢の拡大に繋がるのではないかという考え方で、日本布教自体が中国布教への橋頭堡と考えたフランシスコ・ザビエル以来、広大な中国が宣教師の垂涎の地であった事を思い起せば、こういった思考のプロセスは極めて自然なものと言えよう。また、軍事援助に拠って教勢の積極的・消極的・維持・拡大を図るという方針は領土層に対し宣教師がそれまで執って来たものであった⁽⁶⁾。

大坂城における会見のほば一年後、一五八七年五月二八日(邦曆天正一五年四月二一日)コエリヨは肥後八代において再度秀吉と対面する事になった。当時、圧倒的な軍事力を背景に九州に下向した秀吉は、各地で勝利を得ながら進軍を続け、九州平定迄島津氏を残すのみとなっていた⁽⁷⁾。今回の会見につきフロイスは、一五八八年二月二〇日付の年報⁽⁸⁾と、著名な「日本史」⁽⁹⁾の二つの史料を残している。前者においては、中国征服に関する記述は為されておらず、この件が今回は話題にならなかった可能性もある。しかし、後者では、この会見に同行したポルトガル人俗人(当時、平戸で越冬中のドミンゴス・モンテイロの船の事務長等三名)に対し秀吉は中国征服の決意を述べ、それに対する彼等の意見を求め、彼等の返答に非常に満足した様子を示したと記録されている。このポルトガル人達の返答は具体的に記されておらず明らかでないが、秀吉に一応の満足を与える類いのものであった様

である。

更にコエリヨは、九州平定後、秀吉と再度会見し、そこでも中国征服計画が話題になっている。この前後の事情については、宣教師追放令の公布との関係で屢々言及されているので多言を要しないのではあるが、この報告で問題となる点を挙げれば、この時秀吉はコエリヨの乗船して来たフスタ船に大いに興味を示し、船内を見て廻っている⁽¹⁰⁾が、それ以前に秀吉麾下の諸領主がさかんに同フスタ船にやって来ている事実や、まさにこのフスタ船が「軍船」であった事等であり、それ等を考え併せると、この秀吉のフスタ船訪問は看過できない様に思われる。また、前述のバリニャーノ書翰中に、小西行長がコエリヨに対し同フスタを秀吉に献上すべく進言している事も記されているが、(註(4)に述べた如く、この書翰の内容に全幅の信頼を置く事はできないのではあるが)、これもこれまで述べて来たコンテキストの中で理解すべきものと思われる⁽¹²⁾。

II

宣教師追放令前後の宣教師の軍事的介入とのかかわりあいの中で、中国侵略計画への宣教師側からの関与について見て来たが、バリニャーノの第二次日本巡察を契機に、軍事力行使や軍事的介入志向は依然としてイエズス会内部に燦りつつも表面的には否定されるに至った。しかし、秀吉の中国侵略が新たな布教地の開拓・獲得に繋がるといった期待はそのまま残される事となった。バリニャーノは、秀吉がそれを意図している訳ではないが、彼

がキリスト教徒領主を役職に就け、中国侵略を開始する事で結果的に中国布教の門戸を開く事になるとの期待を書き送っている⁽¹³⁾が、この種の期待は、小西行長が中国側と和平交渉を開始した際、当時在鮮していたグレゴリオ・セスペデス⁽¹⁴⁾がこの機に乗じて中国布教の門戸を開放すべく交渉を進めようと企てた事により、一層高まる事になった。セスペデスは朝鮮から、コエリヨに替って当時準管区長の職にあったペドロ・ゴメスに宛てた書翰の中でこの交渉に触れ、和平交渉をきっかけにして、中国々王から布教許可状を獲得すべく話し合いが持たれた旨、書き送っている⁽¹⁵⁾。

日本国内においても、この交渉に大きな期待が寄せられており、都からオルガンチノが書き送った所に拠れば、中国からの和平交渉使節の離日に際し小西行長が一人のパードレを北京に迄同行させ、北京で中国布教許可の為に交渉をさせる意志であった事がわかる。また、内藤如安が既に赴いており、その影響で宮廷内の宦官達がキリスト教に大いに関心を示している事に言及し、中国布教の可能性について書き送っている⁽¹⁶⁾。中国からは、マテオ・リッチがこの件につき、オルガンチノやフランシスコ・パシオ等の日本からの情報に基き、小西行長が宣教師の中国入国の為努力している旨、総会長に書き送っている⁽¹⁷⁾。中国布教の直接の担当者であったリッチも朝鮮経由による布教に何がしかの期待を抱いていた様である。

他方、秀吉の朝鮮出兵と相前後する様に日本布教を開始したスペイン系の諸修道会士達も、違った視点からではあるが、この交渉に期待を寄せていた。フランシスコ会士、サン・マルティン・

デ・ラ・アセンシオンは、彼の日本に関する報告書の中で、秀吉の朝鮮侵略の結果、日本と中国との取り引き、交渉が開始されるであろうから、その機に乗じて宣教師を中国に派遣し、中国布教を開始すべく論じている⁽¹⁸⁾。更に彼は別の報告書の中で、秀吉の和平交渉の機に乗じてハイナン島を征服し、中国本土征服・布教の基地にすべしとの議論に迄及んでいる⁽¹⁹⁾。このアセンシオンの考え方は、マニラにおいて兼々考慮・検討されて来た中国の軍事的征服計画が、秀吉の侵略戦争を機に再燃したものと考えられるが、その持つ意味を過少に評価すべきではないと思われる⁽²⁰⁾。

ところで、こういったいわば、希望的観測とは裏腹に、朝鮮での戦闘が実施されてゆく過程で、中国布教の門戸が逆に狭められてゆくのではないかという危惧も序々に抱かれるに至った様である。一五九三年一月に、早くも、バリニャーノがこの点に言及している。彼は、マテオ・リッチの努力にもかかわらず中国布教の扉が開かれない時点で、更に日本人が朝鮮侵略を開始した事により、中国人の外国人に対する警戒心が強まり、一層改宗事業が困難になりはせぬかと危ぶんでいる⁽²¹⁾。とはいえ九三年頃は、同じバリニャーノが他の多くの書翰・史料で語っている如く、教勢拡大に対する期待が先行していたと言える。

しかし、朝鮮における戦闘が膠着状態に陥り、和平交渉も決裂した事により、この侵略行為が中国布教に有害となるとする見解が力を持つ様になって行ったと思われる。ドウアルテ・デ・サンデはジョアン・アルバレスに宛てた書翰の中で、前述のバリニャーノの危惧とほとんど同じ見解を披瀝し、中国人の外国人に対す

る恐怖心が増大してしまつたと述べ、直接指摘せぬまでも、中国布教停滞の一因を秀吉の侵略行為に帰するが如き発言を行なつて⁽²²⁾いる。バリニャーノも、若干異つた視点からではあるが、マカオのコレジオに日本人イルマン、同宿を学習の為に派遣する計画につき、自らが推進して来たものにもかかわらず、中国人の危懼を徒らに刺激する事を恐れ、その実施を延期する様指示している。⁽²³⁾

III

次に国内情勢との関係において、宣教師がこの戦闘行為をいかに意味付けていたかについて若干考えてみたい。

一五八七年の宣教師追放令によつて教勢が極端に落ち込んだという事実は見られないが、宣教師の表立つた政治的活動は大きく制限されざるを得なかつたのは言を俟たない。そこにコエリヨによる軍事力行使計画(武器・軍隊の派遣要請)が一つの対抗策として再浮上して来る一つの原因がある訳であるが、周知の如く、この計画は一部分を除き現実のものとはならなかつた。⁽²⁴⁾これとほぼ時を同じくして、国内では高い信憑性を持って、キリスト教徒諸領主の国替が取沙汰される様になつていた。宣教師はその危機感の増大とともに何らかの対抗策を探らざるを得ない状況にあつたのであるが、追放令下の彼等には、国内の政治的・軍事的問題に直接取り得る方策があつたとは思われなかつた。⁽²⁵⁾バリニャーノの秀吉との会見も、この点成果を挙げたとは言えなかつた。かかる窮地に追い込まれた彼等に望みを抱かせたのは、実は、国内諸勢力が再び内乱を起し、秀吉の絶対的權威が崩壊するであ

らうという噂であり、それは秀吉の中国侵略の決行表明をきっかけに、より具体性を帯びたものとして語られ、彼等にもその可能性の高い事が感ぜられた様である。

一五九〇年一〇月八日付長崎発の書翰でバリニャーノは、自らの使節行につき希望を繋ぎながらも、下地方で秀吉の意志に従つて重大な変化が生じ、有馬・大村の領地でも変動の生ずる危険性のある事を指摘している。⁽²⁷⁾更にその四日後には、秀吉は中国征服の為に下向するに際し、大規模な国替を行なう意向であり、有馬・大村の移封も噂されていると、より具体的に述べている。⁽²⁸⁾キリスト教徒諸領主の国替はバリニャーノの言を俟つ迄もなく、下地方のキリスト教界にとつて重大な打撃となる筈のものであつた。こういつた噂の中で宣教師は、キリスト教徒領主の領地内においてすら自粛を求められ、十字架の取り壊し、潜伏等を要請されるに至つて⁽²⁹⁾いる。一五九一年一〇月六日付のバリニャーノの書翰には、長崎統治の為に派遣された壱岐守(毛利勝信)と加賀守(鍋島直茂)は、その実、有馬・大村領の没収、あるいは国替の下準備及び、宣教師の滞留状況の調査にやつて来たという噂の存在とその信憑性の高さについて記述されている。⁽³⁰⁾

以上の様なキリスト教徒諸領主の国替キリスト教界の崩壊という危機感の中で、イエズス会側は秀吉の中国征服に反対する勢力の存在を窺知し、そこに一縷の望みを託している。一五九一年一〇月二二日付でバリニャーノは、中国征服計画に反対する者達によつて国内で重大な変化が生ずるかも知れないと抽象的に述べて⁽³¹⁾いるが、翌一五九二年三月一三日付の書翰では、中国征服の真

の目的が諸領主を朝鮮の地に移封し、⁽³²⁾自分の直臣達で全国を支配する事によって秀吉の絶対的な權威を確立する処にあると指摘した後、この計画に反対するのは困難であるが反感は大きく、結局実現され得ず、国内に重大な異変をひきおこす様になるに違いないと語っている。⁽³³⁾また、この約一月前の二月一五日付書翰においても、中国征服が現実のものとなれば、日本に大きな異変と反乱が生起するに違いないと述べ、マカオの船(前九一年からの越冬船)⁽³⁴⁾が出発する迄に全日本が大きな擾乱に陥り、秀吉の計画も水泡に帰すであろうと述べている。⁽³⁵⁾結局彼は、この事態の推移を見守り、しかるべき対応策を講ずべく日本に残留する決意を固めたのである。⁽³⁶⁾

結果から言えば、こういったバリニャーノの予測と日本残留の決意は双方とも現実のものとはならなかった。中国侵略は、まず朝鮮侵入という形で同年五月には開始され、国内反乱は極一部を除いて生起せず、⁽³⁷⁾バリニャーノはインド副王からの使節という立場上、秀吉の返書を持ってマカオ(インド)への出発を余儀なくされた。しかし、バリニャーノはマカオからも書翰を認め、日本に重大な変革が生起するという確信を繰り返し、その機に乗じて日本に戻る意向であると書き送り、秀吉の死への期待をも含めて、国内反乱により彼の権力が崩壊する事を信じていた。⁽³⁸⁾その根拠は一五九三年一月一日付書翰によって窺い知る事ができる。バリニャーノは朝鮮における開戦時の戦捷にもかかわらず、一五九二年十月には早くも戦線が膠着状態に陥り、日本側の犠牲も徐々に拡大している事実を指摘し、秀吉の渡海も中止されたと述べて

文禄・慶長の役とキリシタン宣教師

いる。こういった状況を根拠に、彼は、朝鮮で戦闘に参加している領主達が無断で日本に戻り、反乱を起こすと予想したのであった。⁽³⁹⁾バリニャーノの希望的観測をよそに、結果的にこの様な反乱は以後も生じなかったの言うまでもない。

しかし、秀吉は戦線の膠着にともない書翰を以って国替えの三年間凍結を諸領主に宣言したと言われている。⁽⁴⁰⁾無論この事は、宣教師にとって少なからざる吉報となった。その後、中国との和平交渉開始を契機に、中国布教への道が拓かれる事への期待が内外の宣教師により抱かれていったのは既に述べた通りである。先の通告通り、国替えは以後も実施されず、一五九六年一月二八日付でフロイスは、和平交渉の決裂により、有馬・大村等の領主が朝鮮で戦闘を続けている間は領地の変更は為されないのであると予想している。⁽⁴¹⁾ここでフロイスは、戦争の悲惨さにもかかわらず、戦闘の継続をむしろ希望している様な記述を行なっている。⁽⁴²⁾バリニャーノはコチン発信の書翰でこの事に触れ、一五九六年二月付の日本からの書翰により得た情報に基き、日本国内に国替の恐れがなくなつたと、一五九七年四月二八日付で書き送っている。⁽⁴³⁾

とはいえ、戦況が日本に有利になり、朝鮮征服が進展すれば、再び国替の危険は再燃する筈であった。事実、一五九七年一〇月八日付でルイ・バレットが長崎から書き送った書翰によれば、朝鮮において兼々ねらっていた一王国(地方)が征服されたという情報朝鮮から秀吉のもとに届くや、彼は自ら下向する事を望んだ事が記され、それにともない、再び朝鮮への国替の危惧が生じていると述べられている。⁽⁴⁴⁾同じバレットは、翌年二月二一日にも、秀

吉の downward が迫っており、それによって国替が実施されるという情報が届いた事を記録している。⁽⁴⁵⁾

結局、宣教師は国内のキリスト教勢力を視点を据えた場合、征服戦争の成功がキリスト教徒諸領主の国替にキリスト教界の崩壊につながると思え、この戦闘が秀吉の死によって結果的には交戦状態のまま終結し、征服地の獲得もできずに終る事になったのは彼等には、主の摂理であると映ったに違いない。一五九八年一月、パシオは、この戦闘により、キリスト教徒達は多大な出費と苦難とを余儀なくされたが、結果的には国替が回避され、キリスト教界の崩壊を免れる事ができたと書き送っている。⁽⁴⁶⁾

秀吉の死と、それによる戦争のいわば中途反端な結末は、その他の面でもキリスト教界に裨益したと言える。例えば、当時長崎及び下地方の統治にあたっていた寺沢志摩守は、太閤の死に相前後して、急速に教会との接近を計り、教会に対する姿勢を極度に軟化させている。⁽⁴⁷⁾ 教会側も、この流動的な政局に対応すべく現状の慎重な分析を行ない本部に書き送るとともに、戦争の事後処理に下向して来た石田三成、浅野長政の双方に接近を計り、政治的な活動を再開している。⁽⁴⁹⁾ 秀吉の独裁的な政権下に息をひそめていた宣教師は、方針の変化が表面化する事を極度に警戒しながら⁽⁵⁰⁾、⁽⁵¹⁾ 状況の変化に適応した積極的な対策を採るべく動き出したと言えよう。

IV

次に、長崎にマカオ間貿易と中国征服計画との関係にも若干触れてみたい。

秀吉が一五九一年来航のナウがもたらした金を買い占めようとした事実については何度か論ぜられて来ており、その越冬の原因を金買占めに起因する軋轢に求めるのが一般的であるが、この他に、朝鮮出兵による影響も見られる事ができるようである。

この事件については諸書に言及されているのであるが、一応簡単にまとめてみると、一五九一年八月十九日長崎に入港したナウは到着と同時に鍋島加賀守・毛利壱岐守の奉行人達によって封鎖され、船載して来た金のリスト提出を命ぜられた。この間、既に長崎に集まっていた都・堺の商人や諸侯の代理人達は事の成り行きを見て商売が不可能と考え、戻ってしまった。この封鎖に対し、カピタンは九月二日付で秀吉の奉行に抗議書翰を送付し、その結果一〇月六日(ないしは、九月二十六日)付で秀吉の朱印状が公布され、ポルトガル人達に非分を申し懸ける事が禁止された。しかし、結局ナウの帰港リミットである三月末迄には商人達は取り引きの為に長崎にやって来ず、越冬を余儀なくされ翌一五九二年一〇月にバリニャーノ等に乗せてマカオに戻った。⁽⁵⁷⁾ というものである。ところで、秀吉の朱印状は一〇月六日(ないしは、九月二十六日)付で出されたものであり、翌年三月末迄十分取り引きを行なう時間的余裕があった筈で、約三カ月の取り引き凍結にのみ越冬の原因を求めるのはいささか無理ではなからうか。フロイス

の記録も、奉行による販売の妨害は「2カ月以上」とだけ述べ、⁽⁵⁹⁾この期間は先のナウの入港から朱印状発布（ないしその実効）迄の時間とほぼ一致する。更に、フランシスコ・ピレスによる簡単な年次記録である「覚え書」によれば、越冬の原因は朝鮮の戦争であると明言されている。⁽⁶⁰⁾また、前述のフロイスの記録でも、奉行達による妨害の他、秀吉の朝鮮出兵にも越冬の原因を帰している。⁽⁶¹⁾フロイスは更に、商人が長崎に着いた時にはナウの出航時期は過ぎていたと言っており、⁽⁶²⁾当時の日本の政情を考えると、商人達が朝鮮出兵の影響でその行動に何らかの「制約」を受けていたものと思われる。天正一九年九月一六日（西暦一五九一年一月二日）に秀吉は証明の命を下し、即座に戦闘準備を開始させ、翌二〇年正月五日（同一五九二年二月一七日）に諸侯に出陣令を出し、自らも三月には名護屋に下っており、小西行長を將とする先発隊は対馬を経由して朝鮮に上陸、四月には早くも釜山城を抜いている。⁽⁶³⁾即ちナウ到着・取り引き凍結・封鎖解除と続き、その後一カ月足らずで証明の命が下され、翌年春のナウ出航リミット迄の間に戦闘準備・出陣・戦闘の開始がそれぞれ行なわれたことになる。奇しくもナウの商品売り捌きの時期が朝鮮侵略行動の準備・開始期にあたった訳で、この為商人達は通常の商業活動を「制約」され、軍需品・軍隊の輸送・供給などを「強いられた」ものである。⁽⁶⁴⁾残念ながら商人達の朝鮮出兵との懸り方を宣教師側の史料によって直接知る事はできないが、この年のナウの越冬には朝鮮出兵が少なからず影響していたと考える事はできると思われる。⁽⁶⁵⁾

一五九三年には、カピタンモール・ドミンゴス・モンテイロのかわりに、ガスパル・ピント・ド・ロシエが来日した。⁽⁶⁶⁾この年の航海につき、ペドロ・ゴメスは一五九四年二月八日付書翰で日本イエズス会の利益が三〇〇〇タエル余にすぎないと予想されるとして、利益の少ない事を懸念している。⁽⁶⁷⁾この三〇〇〇タエルという額は多いとは言えないが、少なすぎるという程のものでもないようである。しかし、これ以外の事は今のところ知る事ができない。

一五九四年は欠航の年であった。この原因につき、前述のピレスは、カピタンモールのドン・フランシスコ・デ・サがダチンで死亡した事をあげている。⁽⁶⁸⁾また、ボクサーはマカオ||マニラ間貿易がこの時期拡大傾向にあった事をも一因としている。⁽⁶⁹⁾日本からは、ナウの不着を危惧した書翰が送られている。一〇月七日付でパソオは、日本人と中国人が交戦状態にある為、中国人がポルトガル人に日本向けの商品の取り引きを拒絶しているのでナウが来ないのではないかと憶測している。⁽⁷⁰⁾翌九五年三月二〇日付でゴメスも、やはり欠航の原因を日本人と中国人との朝鮮における戦闘行為に帰する噂について書き送っている。⁽⁷¹⁾日本国内ではこの欠航は朝鮮出兵による中国人の態度硬化が原因であるとの見方があった事が、この二通の書翰から知る事ができよう。⁽⁷²⁾しかし、マカオからの一五九四年一月九日付のバリニャーノ書翰では全く別の理由があげられている。即ち、前年（九三年）の航海が手間どおり、しかも儲けが少なかつた為、カピタンも商人達も日本航海をしたがらなかつたというものである。⁽⁷³⁾一五九三年の航海は、多分、先

に引用したゴメス書翰の予想通り、利益が少なかったものと思われ、その為折から拡大傾向にあったマニラ―マカオ間貿易に一五九四年の日本航海に投資されるべき資本が流れていったのかも知れない。バリニャーノ書翰をそのまま真実と見做す事はできないが、当時マカオに滞在していたバリニャーノの発言は重視すべきであろう。

一五九五年には、ドン・フランシスコ・デ・サのかわりに、マノエル・デ・ミランダが、一五九六年には、ルイ・メンデス・デ・ファイグレドが司教マルティンスを乗船させて、それぞれ来日したと言われているが、取り引きについては全く知る事ができない。

一五九七年には、ナウは来港せず、フランシスコ・デ・ゴベルスのジャンクが長崎に入港し翌年二月に帰航している。⁽⁷⁵⁾

また、一五九八年にもナウの来港はなく、ヌーノ・デ・メンドサがバリニャーノ・司教セルケイラ等を乗船させた二隻のジャンクで八月五日に長崎に入港し、一方は早くも十月にはマカオに向け出港し、大きなジャンクは翌年初頭、帰航中難破してしまっている。⁽⁷⁶⁾

一五九九年は、前述の大きなジャンクが戻らなかつた為、マカオでは日本で越冬したものと見做して、この年の航海を行なわなかつたものと思われる。⁽⁷⁷⁾

翌一六〇〇年には久しぶりにナウが日本に姿を現し、関ヶ原の役の余燼の中で、大きな利益をあげ帰航している。⁽⁷⁸⁾

以上の様に、朝鮮出兵の具体化する一五九一年から終結の一五

九九年迄のナウの渡来状況を見て見ると、越冬こそ九一年の一度きりであるが、ナウの欠航は九二・九四・九七・九八・九九年、完全な欠航は九二・九四・九九年と、少なくとも交易が順調に行なわれていたとは言いがたい。(もっとも、九五・六年の二年間については予断の限りではない。)この不調の原因を朝鮮出兵にのみ帰する事は無論できないが、九一年のナウの越冬、九三年の利益の減少などは、朝鮮侵略戦争が大きく影響していた様に思われる。また、史料による直接の確認はできないまでも、朝鮮侵略が中国人とポルトガル人間の取り引きに何らかの影を落していた可能性も考える事ができる。(少なくとも、そういった危惧は存在していた。)マカオ―マニラ間の交易の拡大傾向は、スペイン側の積極的な動きと大きな関係を持つものであるが、こういった事情にも刺激されていたのではなからうか。

註

(1) この会見に関しては古くから多くの研究が為されており関係史料もかなり紹介されている。岡本良知『天正十四年大坂城謁見記』松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』1、松田毅一『秀吉の南蛮外交』『太閤と外交』、J・ラウレス『高山右近の生涯』村上直次郎訳『イエズス会士日本年報』下等々枚挙に暇ない。

(2) 一五八六年一〇月四日下関発バリニャーノ宛フロイス書翰 Archivum Romanum Societatis Jesu. Roma; Jap-Sin 45 II f. 86-8

邦訳：村上直次郎訳『イエズス会 日本年報』下 一五〇

頁、同訳『耶蘇会の日本年報』下 二〇六一—四頁、(但し以上二つの訳は *Cartas que os Padres e Irmãos... Tomo II. Evora f. 228v.* に拠る) なお、この会見に同席した者は、コエリヨ、フロイスの他にオルガンチノ、ダミアン・マリオン、グレゴリオ・セスペデス、(Jap-Sin 45 II f. 86) 松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』1 二〇四—五頁、岡本良知『天正十四年大坂城謁見記』一五—八頁、松田毅一『秀吉の南蛮外交』六一—五頁、『太閤と外交』五〇—四頁、J・ラウレス『高山右近の生涯』二〇二頁

(3) 一五八九年一〇月一〇日長崎発総會長宛オルガンチノ書翰 Jap-Sin II I f. 70「準管区長パードレとルイス・フロイス、それに私(オルガンチノ)は、その他何人かと共に関白殿を訪問に行った。そして我々三人のパードレが、何人かのキリスト教徒領主——即ち関白殿の書記官、総司令官で最良のキリスト教徒である右近殿フスト——その時関白殿のお氣にいらぬ人物、及び、その他の者と共に関白殿の部屋にはいった。まず最初に準管区長パードレがはいり、次に私がいこうとしたが、パードレ・ルイス・フロイスがとてすばやく先に行ってしまう、準管区長パードレの側に忽ちのうちに座を占めてしまった。この為、私は列に従って、話をするのに大変困難な状況に置かれざるを得なかった。同パードレ(準管区長)との会見が執り行なわれ、最後に、ルイス・フロイスがそれまでの好意に謝意を表わしはじめた。そして、その後すぐに次の様に述べた。(関白殿が)下に渡り、更には中国へ征服に赴こうと決心しているのなら、ここに居るパードレ・ガスパル・コエリヨに依頼なさる様に。彼は、この件につき、多くの援助をする事ができましよう。というのは、彼はほと

んど下全体を指揮下に置いてからであります。更に、一、二隻の船をお望みならば、これら全てをこのパードレは与える事ができ、またポルトガル人に依って(その船を)操縦(させる)事ができるのであります。

私や、周に居た全ての者には、この様な事は会にとつても、キリスト教界にとつても極めて不都合かつ危険極まりない事であると思われたので、すぐにパードレ・ルイス・フロイスが話すのを止めさせようと努めた。しかし、右近殿フストの切願にもかかわらず彼は(その話を)し、執拗に(その話を)続けた為、それを妨げ、中止させる事ができなかった。」

J・ラウレス『高山右近の生涯』二〇一—二頁、なお、この間の事情に就ては、松田毅一『秀吉の南蛮外交』六二—六頁及び『太閤と外交』五一—四頁に詳細に述べられている。

(4) Jap-Sin II II f. 234v. 訳文については高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』一〇九頁及び同『イエズス会と日本』(大航海時代叢書第二期 6) 八〇—一頁、J. L. Alvarez Taladriz "La Persecución de 1587 y el Viceprovincial Gaspar Coelho, según el Visitador Alejandro Valignano" *Sapientia* 9 このバリニャーノの書翰は、イエズス会士(殊にカブラル、コエリヨ、フロイス等)が、国内戦争において行なった軍事的な介入が秀吉の危惧を増大させ、迫害の一因となったという考えの下に、かかる政治的軍事的介入を規制する方針を改めて打ち立ててゆく過程(高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』一二—一八頁。同『イエズス会と日本』一八〇—二頁参照。また、一五九二—一六一二年の間にも、この件につき方針の変更が加えられているが、それはイエズス会本部からの指令に依る所大である。

Jap-Sin 2 ff. 126, 126v. (Valignano: Obedientias 1592 Cap.º 2 § 5 y 8), Biblioteca Pública de Ajuda, Jesuitas na Asia Codice 49-IV-56 ff. 148-v. (Pasio: Obediencias 1612 cap.º 2 § 5), J. L. Álvarez=Taladriz "Adiciones del Sumario de Japón" p. 459, Jap-Sin 3 ff. 19v-20v (1597. 4. 10, Roma Pe General-Valignano) 等参照の事)で書かれたもので、殊更コエリヨの介入を強調している嫌が見つけられる。就中、インドからの軍隊の派遣については、秀吉の宣教師追放令に対抗すべくコエリヨが押し進めようとした軍事計画(高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』一〇七—二〇頁)を、バリニャーノがこの会見と作爲的に繋ぎ合せた可能性が強い。

(5) 註(3)で掲げた松田氏の詳細な論稿を参照のこと。

(6) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』一二二—二頁、古くは、大友氏に対する大砲の斡旋、信長の依頼?に依る荒木村重の懐柔等の具体例に事欠かない。

こういった方針は既に述べた様に、バリニャーノに依って徐々に改革されていったものではあるが、この時点においては依然として(当のバリニャーノ自身をも含めた)多くの宣教師によって是認され、実施されていたものであった。(高瀬弘一郎『イエズス会と日本 一』七三—四頁参照)秀吉の中国征服が具体化しておらず、ましてその実施がキリスト教徒諸領主及びその領地のキリスト教界に物心両面に互る過大な苦難を強いる結果になるとは思いもよらなかつた時点で、宣教師が前述の様な思考を為すのは極めて自然な事であつたと言えよう。

(7) 『史料綜覧』卷十二 一六〇—一六頁。

(8) Jap-Sin 45 II f. 107v. 村上直次郎訳『イエズス会士日本年報』下 二〇八—九頁。Evora, Cartas II f. 198v.

(9) 岡本良知『十六世紀日欧交通史の研究』四七〇—一頁、松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』1 二九〇—二頁

(10) 松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』1 三〇五—七頁、村上直次郎訳『イエズス会士日本年報』下 二一〇頁

(11) Jap-Sin II II f. 235. 高瀬弘一郎『イエズス会と日本 一』八三—四頁、J. L. Álvarez=Taladriz "La persecución..." p. 111 岡本良知「長崎のフスタ船」(『桃山時代のキリスト教文化』八五—七頁所収)

(12) 岡本良知氏は以上の点につき前掲の論稿「長崎のフスタ船」(『桃山時代のキリスト教文化』七七—一四頁)中で、本稿とは異なった視点からではあるが、極めて示唆に富む指摘を行なっている。本報告もその指摘に負う所大である事を認めるに吝かでない。

(13) Álvarez "Adiciones..." pp. 375, 452 松田毅一『日本巡察記』一六九、一七九—八〇頁。

(14) セスベデスは前述の様に、一五八六年の大坂城での会見に同席し、秀吉の朝鮮・中国侵略計画につき直接彼の話を聞いている。また彼は、日本人女性奴隷売買に関与した為、長崎のカーザから異動させられており、こういった経歴と今回の朝鮮行とは何か関係があるのかも知れないが詳しい所は不明である。

(15) Jap-Sin 12 I f. 182. 一五九四年三月二二日付長崎発ペドロ・ゴメスの総会長宛書翰、アルカディオ・シュワーデー「朝鮮役における日明和平交渉について——主として外国史料による」(『キリシタン研究』第一輯所収)三一—五頁。

(16) Jap-Sin 12 II f. 333v-4 一五九五年二月二七日付都発
総会長宛書翰「シュワーデ「前掲論文」三一六頁、矢沢利彦
「マテオリッチと文禄慶長の役」『日本歴史』七〇所収）一
六頁。

(17) Jap-Sin 12 II f. 373v. 一五九六年一〇月二三日付書翰、
シュワーデ「前掲論文」三一六―七頁。

(18) J. L. Álvarez=Taladriz “Documentos Franciscanos”
“Relación de las cosas de Japón para nuestro
Padre fray Francisco Arzabiaga comisario general
de todas las Indias en Corte. p.104「九五」また、ここ
から中国への（布教の）扉がひらかれる。というのは、この
王（秀吉）は中国の一地方である朝鮮を従え、中国王は和平
交渉の為に多くの贈物とともに大使節を（日本へ）派遣した
からである。また、今後中国人と日本人との間に多くの商取
引きや交渉・親交が持たれる事になるであろうからである。
そして、日本で、日本人・中国人間でキリスト教徒が多くの
親交と交際を行なえば、日本の国王によって多くの者が中国
に派遣される様になるであろう。またもし、現在聖職者が
（十分に）おれば朝鮮に派遣しているであろう。というのは、
朝鮮の総司令官ドン・アウグスチンは熱心なキリスト教徒で
あり、彼等（聖職者）をその地に滞在させたであろうからで
ある。（派遣すべき）聖職者がいれば、その者を派遣する為の
他の機会を必ず（アウグスチンは）提供するであろう。」

(19) Álvarez “Documentos Franciscanos” p.138, Re-
lación de las cosas que es necesario acuda su Majes-
tad para la cristiandad de Japón. 「五五」長崎の港
に要塞を作りうるであろう。そこへは、その防備と、防備の
文禄・慶長の役とキリシタン宣教師

為の人員を供給する為にナウが援助を行なえる。長崎は全日
本の鍵であり、この町からキリスト教徒やドン・アウグスチ
ンの援助によって、暴君を制圧する為の援助ができるであ
ろう。

マカオは中国への扉であるが、ポルトガル人が占領してい
る為、中国改宗への扉がしめられ、不可能となっている。も
しポルトガル人がマカオに住むようになってからでも、カス
ティリヤ人が西インド及びマニラ経由でそこにいれば、信仰
は中国にはいり、広められていたであろう。というのは、日
本の王は朝鮮を征服し、人々によれば、素早く中国人と和平
交渉を行なうに至った。従って、マカオに強力な艦隊を持っ
たスペイン人がいれば、制海権を握る事ができるであろう。
中国への鍵であるアイナン島及び他の地方や沿岸の諸都市を
獲得して、少なくとも名譽ある協定を結ぶ様になるであろ
う。その中で、聖教の公布と、好む者がキリスト教徒になる
事を許すよう宣言させる事ができよう。結局、この協定を
ひき出す絶好の機会が生じたであろうし、以後も生じるであ
ろう。」

(20) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』七六一―一〇〇頁（キ
リシタン宣教師の軍事計画）参照。

(21) Jap-Sin 12 I f. 119. 一五九三年一月二二日付総会長
宛書翰

「中国教会のパードレ達は、パードレ・ミゲル・ロヘリオ
（中国国王へ教皇使節を派遣して布教の扉を開けるき）かけ
にする計画を在中國のパードレ達が立て、その献策の為中国
からローマへ派遣された）が何も交渉せず、同パードレが
（ローマへ）持参した書翰の中で我々が書き送った多くの疑

問・疑義について尊師が全く返答してくださらないため、この中国教会の事態は極めて悪化してゆくと考え、かなり気力や活力を減退させてしまった。事実、彼等には気力を失なうに足る原因がある。というのは、マテオ・リッチがその同僚とともに中国において追放同然になってから既に十年が経過しており、今迄中国にはいつて改宗事業を開始する為の扉は全く開かれてはいない。むしろ中国人の抱いている用心や危惧は朝鮮王国への日本人の侵略行為とともに増大さえしており、刻々と(改宗の扉は)しめられとゆく様に思われるからである。」

(22) (なおこの書翰はマカオからの献策に対し何ら返答をよこさない本部に対し注意を喚起する目的で書かれており多少の誇張がみられる様である。)

(22) Jap-Sin 13 I f. 117. 一五九七年一月二三日付マカオ発書翰(中国教会の維持は困難で、初期の頃からほとんど進展をみせていない事を述べた後、「その他に、人々にとって外国人に対する恐怖心は少なからざるものであって、朝鮮に日本人が侵入したここ数年は特に(そうである。))中国人達は再び外国人に対して恐れを抱きはじめた。」

(23) Jap-Sin 13 I f. 134v. 一五九八年七月一日付マカオ発書翰
「第五の最後の理由は、日本と中国・朝鮮との間に戦争が始められているので特にそうであるが、多くの日本人イルマン・同宿が中国にやって来るのを見て、中国人達が良い事と考えるとは思われないということである。」

(24) 拙稿「キリシタン教会と日本人」II(『史学』四九—一所収)
(25) バリニャーノはその事後処理に神経を使わねばならなかつ

た。高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』(キリシタン宣教師の軍事計画)

(26) 当時宣教師が種々の政治工作をしていた事実は、フロイスの『日本史』(松田毅一訳『日本史』一二巻七五頁・一〇一頁等々)によっても明らかであるが、それ以前、及び十七世紀にはいってからのそれと比べると極めて消極的なものであったと言わざるを得ない。

(27) Jap-Sin 11 II f. 227 「結局、日本における生活は、現在、有馬や大村の全キリスト教界について我々が陥っている様に、常に希望と恐怖の間を往き来している。というのは、(太閤)の意志によって、既に終結した戦争が再発し、当下地方に重大な変動が生ずるのであるという事が、皆の間でかなり確実な事と考えられているからである。また、有馬・大村の領地でも同様な事が起るのではないかと我々が大いに恐れているのも故なき事ではない。」

(28) Jap-Sin 11 II f. 234; Alvarez, Sapiencia 9 pp. 101, 109

(29) Jap-Sin 11 II f. 246v. 一五九一年一月六日付長崎発バリニャーノの総会長宛書翰、松田毅一訳『日本史』一二巻七七・八一・八五頁等参照。

(30) Jap-Sin 11 II f. 247v. 「(長崎統治の為にやって来た岬岐守と加賀守について)ある者は、関白の命令で有馬・大村の領地を没収しに来たのだ、これ等の領主を移しかえに来たのだと言っている。また他の者は、関白が後に変更(国替)を行なう為の下準備に領地の調査に来たのだとも言っている。この情報はかなり正確なものの様であった。」松田毅一訳『日本史』一二巻八〇—九五頁。

(31) Jap-Sin 11 II f. 251. 「しれ(一〇月九日付の部分)を

書き終えてから、関白殿に関する他の情報が届いた。(関白殿は)中国についての企てを実行すべく決心しており、彼自ら、日本の主要な領主ほとんど全員と三〇万の人員と共に(中国に)渡るといふものであった。既にこの企ては全ての者に公にされており、平戸の島の近くにある二つの港に、二つの要塞を作る様アゴステイノ津守殿は命じている。そこに全軍と、これらの領主達が集合する筈である。全軍は多くの船を建造し、強固に準備されている。関白は大変急いでおり、朝鮮に五月初旬に渡り、そこから陸佐いに中国に行く為、人々に三月中に要塞を建設すべく下に下る様命じた。

これ等全ての領主は呆氣にとられ、この企てに大変不服であつたが、あえて口答えする者はない。関白はこの企ての爲の維持費やかねを、各領主や司令官達にわりふつてゐる。彼はこの中国に対する企ての途中で死んだとしても、自分の息子をなくした今は、自分の名声を残す事以外為すべき事はないと述べた。しかし、期限が大変短かく、皆が不承不承であるので、彼が命じている期間内にはこの進攻は実施され得ないであろう。あるいはこの機会に、重大な変化・変動が生ずるかも知れない。」

- (32) Biblioteca Pública de Ajuda, Jesuitas na Asia 49-IV-57 f. 291v. 松田毅一訳『日本史』二卷三〇六頁及び一六二―四頁 「組屋文書」天正二〇年五月一八日付山中長俊書翰(徳富猪一郎『近世日本国民史』豊臣時代丁篇朝鮮役上巻四五八頁所収)天正一九年八月二三日付加藤清正書翰(二八〇頁)木下杢太郎『ルイスフロイス日本書翰』九九―一〇〇、一〇九―一〇頁。
Jap-Sin 51 f. 352 (前掲木下訳の原文書)

文禄・慶長の役とキリシタン宣教師

「この企てがうまくすすめば、彼(秀吉)の言っている様に国替を行ない、キリスト教徒領主は他の者と共に朝鮮か中国の地に送られ、彼等が日本国内に持っている領地は異教徒の領主に与えられるという事は明白である。この事は、我々及びキリスト教界にとって完全な崩壊を意味したであろう。というのは、たとえあちらにより大きな領地を与えられたとしても、領主が替る事で長い間我々が働き、援助して来たその地のキリスト教界が、我々の隠れる場所もなく、失なわれるから全く益にならないし、我々はそんなに早くキリスト教徒領主が領地を持つ様になる中国や朝鮮に渡る事もできないからである。更に外国によって力づくで奪われた土地は、そんなに早くは落ち着かないし、決して安全とはならないからである。故に、関白が死ねば、既に噂されている様に、全員が反乱を起すであろう。また、力づくで征服した土地に多くの会員が渡るのも適切ではないであろう。」

また、領主自ら移封を願ったと言われる例も古くから指摘されている。例えば、「纂韓陣文書」天正二〇年六月二〇日付長束正家・増田長盛宛加藤清正書状(武野要子『藩貿易史の研究』一三六―七頁及び徳富猪一郎『近世日本国民史』前掲巻五七―一二頁所収)この例からも、征服地への移封が必ずしも一方的に秀吉側からの強制として立案されたとも言いきれないが、宣教師側の史料による限り、こういった意向がキリスト教徒領主側にあった事実は読みとれない。

- (33) Jap-Sin II II f. 288-v. 「もしこの侵攻が実施されると、全キリスト教界はめっちゃめっちゃに破壊されてしまう。というのは、彼の決意は朝鮮や中国に渡る事より、むしろ全領主をその家臣とともに日本から追い払う事にあり、これは全

領主が生死にかかわらず朝鮮に残り、彼が絶対の支配者となり、彼等の領地に対し好き勝手な事をする為であるといった事は明白に思われるからである。また、彼等が出航すればすぐに、関白殿はその領地を自分の家臣に分けてしまい、当ヶ国、九ヶ国の絶対的な支配権を得て、自分の意志で全てを処理しようとしている事は確実と思われる。この(下の)国々に我々はキリスト教界の主勢力を持つており、この全組織も今やここにあるので、もし彼が名護屋に来てこの侵攻が実施に移されれば、ましがいなく、会は全キリスト教界とともに崩壊してしまうであろう。(この)実施に関して、主が彼の計画を妨げて下さらなければ(実施に移されるのは)ましがいのない所だと広く考えられている。全てに関して、彼の持っている権力と支配力は強大で、彼のその強大な権力・気力の故に、人々が彼に対して抱いている恐怖心・畏怖心は大変なものである。どの領主もあえて、(朝鮮・中国に)渡る事はできないと言い出す最初の人間になろうとはしないからである。また、多くの(領主)が一致して彼に反旗を翻す様な事も少なからざる困難をともなう事である。というのは、(関白は)自らこの朝鮮・中国侵攻に関して、反対する者及び何がしかの困難を言い出す者は、追放し殺すという法令を公布しているからである。故に、あえて反対したり困難を申し出る者もなく、皆急いでこの侵攻の為に多数の船を建造し、戦争用の武器弾薬を準備している。関白も現在まで、名護屋に莫大な供給品・食糧を送って来し、送りつづけている。

以上の事にもかかわらず、この企ては全ての人々に悪く知られており、いかなる国に対してもこの様な残酷で暴力をふるう事が起るとは思われない。というのは、全ての人々が

(朝鮮に行く事は)関白が(彼等の出發後)その領地を与えてしまうであろう者の手中に、よるべない自分の妻子を残して死に行く(様なものである)と考えているのは疑いのないところで、日本に何らかの重大な異変が生ずるに違いないと思わざるを得ない。私もましがいなくそれが生ずるし、決してこの侵攻は実施されないと考えている。というのは、全ての人が死ぬ為に(朝鮮に)渡るといった事の他に、(この企ては)それ自体重大な困難を抱えているからである。この企てによって全日本がいかに大きな心配・気苦労の中に置かれているかは説明できない程である。彼は毎日せかせ、より多くを求めている。この様な訳で船が出航しなかつた事が、理にならなっていないと考えられても、我々はそれが主の摂理であり命令であると思つてゐる。というのは、この侵攻が万一実施された時に、事態に備える為に、会はこの船以外の避難所を持たないからである。またもし実施されない時には、当然(国内に)重大な異変が生ずるに違ひなく、生じうる大きな変革・変動の故に、私がローマに行く予定だったイルマン達と日本に残留している事は神の摂理であろう。会も、キリスト教界も、この神の御処置に喜んでおり、我々は大いに満足して、当キリスト教界を主が前進させてくださるのを期待している。」

(34) 本稿IV章参照。

(35) しかし彼はこの様な国内の反乱を全面的に支持している訳では決してない。なぜならば諸領主が太閤との戦闘を余儀なくされ、いずれにせよキリスト教界が少なからざる苦難と危険に晒されざるを得ないからである。結局彼は、最終的に主の摂理に全てを委ねている。この点註(30)の史料参照。

は下九ヶ国の領主で、家臣と共に派遣される。また、(秀吉は)彼等には中国で他の領国を与えるであろうと公然と言っている。たとえ表面的には皆、彼に喜んで行くと言い、多大な武器や船を作っているが、この企てに加わるに際し、重大な苦痛や極度な不満・悲愴感を抱いていない者はほとんど見出されないと思われる。またもし(この企てが)決行されたとしても失敗に終るに違いない、日本で大きな異変・反乱が生ずるに違いないと固く信じられている。というのは、噂によれば、多くの領主は朝鮮や中国に死に行く為に領地から引きずり出されるよりは、関白殿と戦って家臣と共に自分の領地で討死する方を望むと決めているからである。この船がマカオに向け出発する以前に、この企ては全日本が重大な擾乱に陥る事によって崩壊するであろうと思われる。いずれにせよ重大な惨禍の他は期待できない。この苦痛のほんの僅かな部分ですら我々は耐える事ができない。というのは、全会員とカーザが、日本のキリスト教界の主要部分とともに、この下の地方にあるからで、もしこの領主達が中国に行く様な事になれば彼等は自分の領地や王国を失ない、当キリスト教界全体も崩壊し我々は救済策もなく、重大な危機に陥ってしまうであろう。また、擾乱が生じ、(朝鮮・中国へ)赴く事をしないならば、関白殿と悲惨な戦闘をかまねばならぬ。大変な恐怖心があるので、少なからざる苦難と危険に陥る事になるであろう。しかし、結局は主がキリスト教界と我々に特別の配慮を為したもうであろうから、これらの恐怖・危険もうまくおさばき下さるであろう。(中略) f. 284 もし彼(関白)が幸運にもナウの出発以前に死んだり、多くの領主

文禄・慶長の役とキリシタン宣教師

達が彼に反旗を翻したりして、結果的にその戦争が良い方向に向かう事が期待できる場合や、キリスト教徒領主が危険に陥る事なしに、当地に私が滞留できる様な場合には、病気のふりをしたりしてマカオに船が行ってしまっても日本に残留するでありましょう。しかし、インドに行く様強制されるのがおちのようです。(中略) f. 284v. (秀吉は甥に関白の職を譲ろうとしているが、これは名目上の事に過ぎない、しかし)もし関白殿が死んだり、中国に行ったりすれば彼(秀次)と我々がうまくゆかない事もないであろう。また、関白が当下にやって来るといので、当地九ヶ国の領主達は異教徒であれキリスト教徒であれ、皆(戦闘)人員や、武器の準備をすすめなければならぬ。そして、名護屋の港に行つて彼の到着を待たなければならぬ。この為、これらの領主達の間では、(朝鮮・中国出兵)が決定的な事で、関白がやって来るのが明白になった時点で、当地方や日本のその他の王国で重大な反乱や擾乱が惹き起こされると期待されている。そして、その結果、日本で極めて重大な大変革が行なわれる事であろう。(最後の中略以降は同書翰の追伸部分にあたる)

(37) 例えば梅北国兼による一揆などが挙げられる。『大日本古文書』島津家文書之一、三五六一七頁。『同書』三、二五九頁、『島津史料集』征韓録一五五―八頁(『第二期戦国史料叢書』六所収)『熊本縣史料』中世篇第五頁外史料、井上文書五四―九頁、新納文書七五三―四頁、『大日本古文書』毛利家文書之三、一七八―九頁(但し、年代比定に誤りあり)『同』小早川家文書之一、二八四―五頁、『史料綜覧』卷一二、三六一頁(参照)なお、この一揆に関する教会側史料は、Jap.Sin. 51 ff. 353v-4. 一五九二年一〇月一日付フロイス年報、(木下)前

掲書』一一二—三頁)松田訳『日本史』二卷一六四—六頁及び注(9)(10)一六九—七〇頁、(但しこの注では、梅北一揆と直接関係のない天正十七年の戦鬪とが混同され、栖本殿を志岐鱒泉とする等の誤りがある、もっともこの点同氏は同書一一卷三四六—七頁注(6)において、この一揆に参加した栖本殿は栖本鎮通であると推定を訂正しておられる。) (本稿脱稿後松田氏は更に、同書一二卷の訂補において明確に訂正しておられるのを見出したので付記しておく。)

Josef Franz Schütte. S. J. "Monumenta Historica Japoniae I" p. 407 (Ajuda 49-V-3 f. 10v.) 「この年(一五九二年)七月サンチアゴの頃に、サツマで Umeqita という名のサツマの一司令官が反乱をおこし、大きな擾乱が生じた。その反乱で、彼と Izume no Yacata, Fatandono, Somotodono, Conzura が死んだ。」

Josephus Franciscus Schütte S. J. "Introductio ad Historiam Societatis Jesus in Japonia 1549-1650" pp. 542-3. なお、この一揆に関し看過できない事は、一揆の事後処理において、これを契機とした秀吉の国替実施を恐れたバリニャーノが、結城弥平次を仲介にし、浅野長政と商議せしめ隠当に処理すべく政治的な活動をした事である。これは日本側史料には見られないものであるが、軽視できない事実である。しかし、他にこれに言及した教会側の記録を今のところ見出せない。

(38) Jap. Sin II II f. 330. 一五九二年一月六日付総会長宛書翰「関白が死んだり、朝鮮に対する企てが今年うまく運ばないために生ずるであろうと期待されていた種々の擾乱の故に、今度のモンスーンで六月初めに日本へ渡れるようになる

かも知れない。(中略) f. 331. (日本へ司教を着任させる事は今のところ不適當かつ不可能な事であり) 日本へ司教が赴く道が閉じられているのは、この迫害がやがて終結し、日本で大なる改宗が行なわれる確実な徴候と私には思われる。また、日本の現状は、これに関し、大なる予想と希望とを与えている事は疑いない。(中略) f. 331v. (司教が) 日本に行くのはどうしても不可能であるが、中国のこの港(マカオ)に渡来するのは何の障りもなく、むしろ適切で、理にかなった事と思われる。従ってこの四月には(中国)にやってくると思われている。そして、そのうち関白の死か、彼が今握っている帝国と権力の崩壊によって、その次の年には司教が渡来できる様主がおとりなし下さるものと期待している。」

(39) Jap. Sin II I f. 3v-4. 「関白殿は去年朝鮮から始めて、中国を征服する事を決心し、この為二〇万人以上の人員を朝鮮に派遣するようにした。これらの中には我々のキリスト教徒領主達の全てがおり、その重臣達の大部分とともに渡海して行った。暴君自らも、更に一〇万人と共に渡海する筈であった。はじめに侵入して行った人々は全く抵抗を受けずに朝鮮の大部分を従え、陸路一〇〇リーグワ以上も侵入し首都に至り、そこを占領した。この企ての名譽は、アグスティノ津守殿と彼に同行した他のキリスト教徒領主達のものとなった。彼等が初めに侵入し、王国の宮殿や首都までが征服された。彼等による征服の後、他の領主や司令官達が到着した。朝鮮の国王はその兵と重臣とともに、内陸伝いに中国との国境まで引きこもり、山々(その王国には木々のおい茂った大きな山々がある)に隠れている他の朝鮮人達に対し、彼等の維持の為に出来る限りの食糧を持って来て、残ったものは全て焼

き払えと命じた。彼等はこの事をきちんと実行したので、日本人が土地の領主となり、町や土地を占領しても、僅かの間に食糧の重大な欠乏をきたしてしまった。(日本人達は)あたかも籠城している時の様にひどい空腹に陥り、その解決の為にしかけると、山々に隠れている朝鮮人があとをつけ、彼等に大きな被害を加えていった。この他、日本人のものより大きく強力な多くの船で形成されている海軍によっても日本軍は重大な損害を加えられた。我々が出発した一〇月には既に、日本人はこの企てがうまく行く事に疑念を抱く様になっていた。渡海寸前であった関白殿もそれを控えて都にもどり、人員を再編成し、別の年に渡海するであろうと述べた。この事で日本の政情は宙ぶらりんではっきりしない状態になった。そして、次の事が確実と考えられ、かつ期待されていた。即ち、今年大きな異変と反乱が生じ、朝鮮に渡った領主達の多くが関白殿に知らせずに日本に戻って来て、関白は、自分の持っている司令官のうち最良で最大の部分と子飼いの者達をその家臣の大部分とともに朝鮮の戦争に派遣してしまっているの、既に弱体化し消耗していると考え、日本に到着するや否や彼に対し戦争を仕掛けるであろうというものである。

しかしながら、我々はキリスト教徒領主の身边に生ずるであろう事に大変心配している。というのは、食糧品の供給に關しては他の誰よりもうまくいっている事を彼等の手紙から知っているが、「というのは、侵略して行った最初の者なので、見つけた物を自分のものにできたからである」他のいかなる日本人よりも内陸深くはいりこんでいるので、ひきあげる時の危険がより大きいと思われるからである。必然的に殿にな

らざるを得ないし、背後に敵をひかえなければならぬ。従って彼等に生ずるであろう事につき恐れを抱くのは当然で、彼等もその主要な家臣をとまなっているの、もし「主はそれをお望みにはならないであろうが」彼等に不都合が生ずれば、彼の領地で重大な異変が生ずるに違いない。というのは、主要な殿の全ては自分の領国の後継ぎたる幼い息子(しか)持って(いない)「そのうちだれも六才を超えていない程である」し、暴君は自分の力が残っていれば前述の様にもし彼等がたまたま死ぬ様な事があれば、その領地を他の者に簡単に与えてしまうであろうからである。またもし、彼に対し反乱が生じ、他の領主が彼に戦争を仕掛けたらすれば、毎月のように日本で生じている如く、異教徒のより強大な者によって征服されてしまうであろう。(中略)以上が、我々が出発した一〇月頃のイエズス协会会员及び日本が陥っている状況である。」

(40) Jap-Sin 51 f. 353v. (木下『前掲書』一一一頁)

(41) Jap-Sin 52 f. 250 「年報より分けられたノート・ここでは本年九六年に生じた諸事の経過、日本の俗的状況及びいくつかの奇蹟について論ずる」と題した記録「(和平交渉の失敗に對する) 太閤の怒りは他の非常に重要な事を引きおこした。というのは、朝鮮の戦争が終れば、太閤は有馬・大村・平戸・五島に属するいくつかの領国・領地を替えるであろう事は確実と思われていたからで、それらの国々に我々はキリスト教界の大なる基礎とほとんどの勢力を持っており、異教徒の暴君の領有になれば、ほとんど全てが失なわれ、消滅してしまつたであろう。しかし、これらの殿達が朝鮮で太閤の為に働いている戦いが続けられていけば、領地は同じ状態のままでおかれるからである。」

(42) シュワデー『前掲論文』三三四頁の訳文？はコンテクストからは誤りとは言えないが、翻訳としては全く承服できない。ここでフロイスが披瀝しているのは、和平交渉決裂とそれにもなう戦争の継続が国替え防止につながったという見解であろう。

(43) Jap.Sin 13 I f.65v. 「(日本からの手紙により、太閤は甥の死亡と、朝鮮征服の不調とによって、疲労しており、キリスト教徒に対して迫害を加えようとせず、その年十分な年貢収入と領地を持った一二三人以上の領主が改宗した事がわかった。)その他のキリスト教徒領主も、たとえまだ朝鮮から日本に戻ってはいないとはいえ、自分の領地に変化の生ずる恐れなしに全員安穩としている。そして、(彼等の帰国が)毎日待望まれている。」

(44) Jap.Sin 13 I f.70v. (68v.) 「ここまで書き終えた時、朝鮮の戦争と、キリスト教徒達に生じた事についての情報をうけとった。それは、かねがね狙っていた有力な(朝鮮の)一王国を征服したというものであった。太閤は、この勝利に喜んで当下の王国長崎近くの要塞に留まる事を望んでいるという。これは我々がこれまで蒙った事に更に加えられた少なからざる難事である。またもし、想像されている様に、彼が當下から全てのキリスト教徒領主をその妻子・家族とともに朝鮮に送り出し、彼等にそこで他の土地を与え、彼等の(本来の領地)については、自分の異教徒の家臣に(与える)という事が事実であれば、我々がこれまで蒙った最大級の苦難の一つとなる。」

(45) Jap.Sin 13 I f.130 「他の(手紙：註(44)引用の一五九七年一〇月八日付書翰を指すと思われる)によって、太閤が当

下の地方にやって来て、キリスト教徒領主を追い出し、異教徒(領主)を置くという情報があり、それは我々にとって重大な苦難となろうと尊師に書き送ったが、今や将にそれが実現せんとしていると思われる。というのは、彼が一緒に連れて来る軍隊の為に大量の米をいれる大きな *seleyros* が既につくられているからである。」

(46) Jap.Sin 54 f.14 「この戦争はキリスト教徒にとっては大変な苦勞・出費となったが、もしその戦争がなかったら、太閤が日本のほとんど全ての領主に対して行なった様な土地の没収を行ない、もっと良くない他の土地を与えたであろう事は疑いなく、また、これによって全キリスト教界が崩壊したであろうから、主に尽きない感謝を奉げるべきである。(主は)朝鮮に戦争を仕掛けるという太閤が犯した不正を、特別な摂理をもって当キリスト教界の維持に役立てて下さったからである。」(この書翰は一〇月三日付総會長宛のものであるが、訳出部分は五日以降に加筆された追伸部分である。)村上直次郎訳『イエズス会年報』キリシタン研究二輯一一三頁、及び、松田訳『日本史』二卷三三七頁も参考にした。

(47) Jap.Sin 13 I ff.166-v. 一五九八年一〇月四日付長崎發総會長宛バリニャーノ書翰「いかに太閤が命令をしようと、彼が死ぬばまぢがいなく日本に重大な変化が生ずるのである。既に、全領主は太閤が生きているのを疑っているようであり、寺沢殿は軟化している。准管区長パードレは朝鮮に寺沢を訪問する(為の人物を)派遣した。そこには、その当時、司教も私も彼に對し手紙を送っていなかったが、我々が隠れていてみつけられるよりも(我々の到着を)彼に知らせた方が適當であろうと皆に思われたからであった。この伝言を持

って朝鮮に行った者が（その地に）到着した時、既に太閤様の病気の情報が伝わっていた。それについては、こちらを出発する前にはまだ知られてはいなかった。この情報で寺沢殿は大変軟化し私の来日は的確なものであったと言った程であった。というのは、時間が経つに従って、より適切と思われるれば、（こちらに）滞留したり、（日本に）行ったりする事ができるからである。私は彼に書き送らなかつたのに伝言を持参する者を送って来て、私に対して来日の祝辞を丁寧に書き送って来た。そしてこの前出發した後、インドに向けて私に手紙を書こうと思っていたが、我々の言葉も習慣も知らないものでそうしなかつたと言つて来た。また同時に、準管区長バードレに対し米二〇〇梱（俵？）を送る様命じた。これによつて我々は皆、彼が軟化し、我々が安全となつたと考えた。私はまた、キリスト教徒領主達にも朝鮮へ訪問する為の人物を派遣したが、彼等は皆私に返書を送つて来て、我々の来日に大なる喜びを示し、主の摂理の忠告、やり方と人間の知との間にいかに大きな違いがあるかが現示された。また、我々は安心する事ができ、今のところ寺沢と非常にうまく交渉できるであろうと述べた。司教の来日については、キリスト教徒領主は皆知っているが、いくつかの妥当な観点からして、そんなに早く寺沢殿には知られない方が良からうと思われた。また、皆が強く次の様に我々に勧めた。即ち、これらの情報にもかかわらず、太閤様が死に、今朝鮮にいるキリスト教大名が戻つて来る迄は、（我々の活動方針）に変更を加えるべきでなく、我々が常に維持して来た慎重さを以つて生活すべきであるという事であった。というのは、太閤様は既に和平を決心しており、最善の方法で日本に戻る様命じているか

らである。それ故、我々は今迄隠れて来た方法でもって、未だいるのである。」（なお、この書翰に近い趣旨の書翰を二〇日付でも書き送つてゐる。 Jap-Sin 13 I f. 187）

(48) 村上訳『イエズス会年報』キリシタン研究第一二輯一二二—一三頁）一五九九年一〇月一〇日付総会長宛バリニャーノ書翰。

(49) 村上訳『前掲書』一二三頁。

(50) Jap-Sin 13 II f. 260. 一五九九年二月二日付長崎発総会長宛バリニャーノ書翰「全キリスト教徒領主にとつても、我々にとつても、今のところ噂になり、太閤様にかわつて統治を行なっている人々に不快な感をもたらす様な變動を行なうのは適當ではないと思われた。というのは、当地では異邦人である我々が、太閤の死に対し、変化や喜びを示す様な誤りを犯したと思われぬ為である。「同様に、今迄日本人に対し、大なる効果と教化を以つてやつて来た。」しかし、彼の死によつて我々は全キリスト教界とともに障壁物を取り除かれ、我々に害を与える事のできる敵対者をもつていないと皆に思われている。また、日本の改宗の大なる扉は開かれたとも考えられている。更に、日本では無分別に思われる様な外的變化を我々が示さなくても、この平穩がいつまでも続く筈はないと考えられている。」

(51) Jap-Sin 13 II f. 257v., Biblioteca de la Real Academia de la Historia, Madrid; Cortes 565 (9-2665) ff. 19-22v. 一五九九年二月二〇日付長崎発バリニャーノのポルトガル管区長宛書翰及び註(引用史料参照)。

(52) 高瀬弘一郎「キリシタンと統一権力」二〇六頁（『岩波講座 日本歴史』近世1 所収）C. R. Boxer: "The Great Ship

from Amacon" pp.55-6, pp.319-22 (但し、秀吉がこの金の買占めを命じた事実を直接語っている史料はない様である。)

(53) 一五九一年一〇月六日付長崎発バリニャーノ書翰 (Jap-Sin II f.248-v) 木下『前掲書』及び、松田『日本史』一二巻一〇〇頁 (国内史料もこれに相当する)

(54) 鍋島・毛利とイエズス会との間にそれ以前から軋轢のあった事もこの事件に影響を与えていたかも知れない。(松田『日本史』一二巻七五―八〇頁)

(55) 『佐賀縣史料集成』古文書編第三卷「鍋島家文書」二八二―三頁(『長崎叢書四』『増補長崎畧史』下巻三八九―九〇頁) 邦曆七月一五日付書状、但し『佐賀縣史料集成』はこれを天正二〇年に比定しているが、天正一九年の誤りであろう。なお、違った根拠からではあるが、小葉田淳『金銀貿易史の研究』六六―九頁、Boxer, pp.319-22 も天正一九年説を採っている。

(56) 『佐賀縣史料集成』前掲卷二八四―五頁(『長崎叢書』三九一頁) 邦曆八月一九(九)日付朱印状

(57) 一五九一年一〇月六日付前出バリニャーノ書翰 Jap-Sin II II f.248-v. 木下『前掲書』七五―九頁、松田『日本史』一二巻一〇〇―六頁。

(58) この点従来の解釈では越冬の原因をこの軋轢に求める余り、朱印状、甲比丹の抗議書等を天正二〇年に比定していた。しかし、こういった比定はいささか無理である、Boxer, Great Ship pp.319-22 註69参照。また一六〇〇年の航海を参照の事(高瀬弘一郎「糸割符制度の起源について」『古文書研究』一四号所収)

(59) 一五九一年一〇月一日付フロイス年報 Jap-Sin 51 f.352.

(60) Ajuda 49-V-3 f.10v. (Boxer, Great Ship pp.55) 「カピタン・ロケ・デ・メリヨが長崎に着いた。朝鮮戦争の為、その年売れなかったので越冬した。」

(61) Jap-Sin 51 f.352. 「このナウが越冬するなどはほとんど考えられていなかった。というのは、当地(長崎)に(ナウが)着いた時には既に三〇〇、〇〇〇ドウカード以上を持って商人達が待ちうけていたからである。そんな事は日本では今までなかった事であった。それ故、今年は今迄よりは短期間で売り捌けるであろうと考えられた。もし壱岐守や加賀守が前述の様に二ヶ月以上も販売を妨害したり、関白が朝鮮への企てを実行したりしなかったら、そうになっていたであろう。」

(62) Ibid, 但し松田『日本史』一二巻では(一〇六頁)秀吉からの書状が届くと金を求めて商人が殺到し、金は極めて高価で売却された事になっている。この時期がいつか判明しないが、金だけは戦時における重要性故に、その年内に売却されたのかも知れない。絹(生糸)に関しては翌年にもちこされた事は明らかである。

(63) この間の日時は『史料綜覧』卷十二に依る。

(64) 無論ある種の商人団はこれらの軍需関係事業に積極的に関与し利益を上げていた訳である。しかし、まさにその意味において、この戦争が彼等を含めた商人達に「制約」を与えていた事はまちがいない。

(65) 註62に記した金の売価高騰もその現れであろう。この他、この年の航海についての史料を次にあげておくことにする。
一五九二年二月一五日付長崎発バリニャーノ書翰 Jap-Sin

II II f. 283v. 「ナウが今年(度)中国に向け出発できるかどうかわからない。というのは、絹(生糸)はほとんど売れておらず、二月一五日の現在になっても堺や都からやって来ると期待されている商人達は来ていないからである。もし三月中に売り捌けなければ、それ以後は出航できないであろう。商人達がやって来るのは大変疑しくもしそうなたとして、残されているのは一月半である。この事や、全日本に存在する動揺や悲嘆の原因は、他でも書いた様に関白殿が大軍を率いて中国征服に行く事を決心しているところにある。」

(69) Ajuda 49-V-3 f. 11. (Boxer, Great Ship pp. 57-8, Schütte, MHJ I pp. 407-8)

(70) Jap-Sin 12 I ff. 168-v. (高瀬『前掲書』五九二—三頁)

(88) Ajuda 49-V-3, f. 11, (Boxer, Great Ship p. 58, Schütte, MHJ I p. 408.)

(69) Boxer, Ibid.

(70) Jap-Sin 12 II ff. 197v-8. 「今年はナウが来ない様であるが、我々は大変な窮状に陥っており、もし本当にナウが失なわれれば重大な事態となる。日本人と中国人とが朝鮮で行なっている戦争が原因で、中国人が取り引きを拒絶しているので(ナウが)出発しないのだと想像し、ナウが失なわれたものではないと期待している。」

(71) Jap-Sin 12 II f. 259v. 「それによって我々の維持の為の物資が届けられる中国からのナウが、今年に欠航したので、我々は大変な苦難に陥っている。何人かの主要なキリスト教徒が米を我々に与えるという救いがなければ、もっと酷い事になっていただろう。ナウが来なかったのは、今、日本人と中国人との間で朝鮮において生じている戦争が一原因だと言

文禄・慶長の役とキリシタン宣教師

われている。」

(72) これは当然、中国人の外国人アレルギーの増大と結びついている。註(28)及びその本文参照。

(73) Jap-Sin 12 II f. 222v. 「バリニャーノの来日は現在のところ不都合であるという)返答とともに、今年に航海もなかった。というのは、ナウが大変遅く戻って来て、儲けも僅かだったので、カピタンも商人達も航海をしたがらなかったからである。」

(74) Ajuda 49-V-3 ff. 11-v. Boxer, Great Ship pp. 58-9.

(75) Ajuda, Ibid. f. 11v. Boxer, Ibid p. 60.

(76) Ajuda, Ibid. Boxer, Ibid. pp. 60-1. なお小さなジャンクの出発については Jap-Sin 54 f. 1 また、この他にヒル・デ・ラ・マタの乗船したジャンクがマカオを見失い直接日本に到着している。

(77) Boxer, Ibid. p. 61.

(78) 註(68)の一六〇〇年の航海についての文献参照。